型式変化、いわゆる土器の変化におけるその背景

―真脇遺跡出土土器群を中心に―

堀　井　泰　樹

要　　約

本論文は3部構成となっており、各部の要約をそれぞれ各節に分けて述べたい。

第1節　蜆ヶ森式及び福浦上層式の成立過程

第2章において、蜆ヶ森式と福浦上層式についてこれまでの型式学的研究を追ってみた。特に蜆ヶ森式においては、北陸地方において資料数の少なさからその成立過程を復元することはできないでいる。しかし、北陸地方独自の土器型式という認識はされている。真脇遺跡の資料において、この期の器種構成などを再確認し、まず地域的な研究を追って、その後に広域的な位置づけをおこなうという型式学的研究方法の常道をいくべきものである。

次の福浦上層式の成立過程であるが、この期の成立過程を見るには、まず新潟県・鍋屋町遺跡の資料を再検討する必要性がある。鍋屋町式（系）土器群は、その成立過程の中で、中部高地・関東地域の諸磯c式の影響を確かに受けているが、その土器群の中には、北陸地方独自の土器型式である蜆ヶ森式の土器群も含まれている。また、新潟県地域において、諸磯c式が波及している分布圏に偏りが確認できる。今村啓爾氏が諸磯c式をその地域によって細分しているが（今村；2000）この諸磯c式の特徴である、

口縁部に耳状突起を付け、ボタン状貼付文を施す土器は、新潟県地域の山間部地域、塩沢町吉峰遺跡・同町万條寺遺跡・十日町市北原八幡遺跡等の遺跡群で見られるのに対し、日本海側地域ではあまり見られないと言う、分布圏の特徴が見られる。このことをどのように捉えていくか、さらに真脇遺跡から出土している福浦上層式を以上のことを踏まえた上で、どのように位置づけられるのかが、今後の課題となろう。加藤三千雄氏による広域的編年の位置づけは（加藤；1997)、今後の研究方向の指針となりうる。

第２節　蜆ヶ森式期から福浦上層式期におけるその変化過程

土器変化で最も顕著なのは、「形態」であり「文様」である。この２つの変化属性の中で特に注目したのが、「形態」である。この「形態」変化を見るためには、土器が煮沸具としてどのぐらい機能があるのかを調べるのが最も有効な方法であると考え、容量分析をおこなってみた。結果、蜆ヶ森式期と福浦上層式期の連続する土器型式の間には確固たる変化過程を示すデータは得られなかった。ただし、器種構成が貧弱な蜆ヶ森式期において、深鉢の容量はあまりその差が無く、平均的な容量であった。だが、器種構成が豊富になってくる福浦上層式期以降では器種による容量に差が開き、このことから、おそらく土器の使用目的により土器形態を変えていた可能性も考えられる。

次に、土器本体の中で最も圧力がかかるのは底部である。その底部形態もしくは成形で、蜆ヶ森式期では特徴的な成形方法を見せている。その成形方法とは、円盤状の粘土板に胴部に繋がる粘土を積み上げていく方法である。この成形方法は蜆ヶ森式期の前段階で見られるものであるが、蜆ヶ森式期段階で若干異なるのは、この円盤状の粘土板と胴部に繋がる粘土との接合部分を補強することである。この補強をおこなうことにより、底部底辺と胴部との剥離が少なくなったと考えられるが、蜆ヶ森式期ではまだこの底部底辺の破片が多数出土している。しかしながら、次の福浦上層式

段階では底部底辺のみという破片が圧倒的に少なくなっていく。このことは、福浦上層式段階では、底部成形技法がより強固なものを形成していったからなのではないのだろうか。

底部形態と土器形態の間に、密接な関係も今回の分析で明らかになった。蜆ヶ森式期での底部形態は、「逆L」字状の底部のみだが、福浦上層式期では主に胴部羽状縄文もしくは縄文を施す土器群に対しては、「逆L」字状の底部形態であり、胴部に半隆起線文で文様構成をおこなう土器群には底部底辺から胴部にかけて丸みを帯びた形態の底部になる。前者においてその容量は後者の約5倍である。このことから、土器形態が大きなもの（容量的に）になると、より強固な底部を形成していたと考えられる。

以上のことから、蜆ヶ森式期と福浦上層式期の土器形成方法を見た場合、明らかに福浦上層式期が蜆ヶ森式期と比較して「進歩」していることがわかる。より多飾化になり、より大きなものを作り出し、より多種多様な器を作り出していく。このことは浅鉢は他地域の土器そのままを取り入れ、文様方法も単純なものでしかなかった蜆ヶ森式期とは格段の差がある。何故、このような現象が起こるのか。次の節で本論の結論として述べてみたい。

第3節　「土器変化」の背景

発掘調査された遺跡から出土してくるモノ、いわゆる「遺物」は、土器だけであるということはほとんどない。集落遺跡なり生産遺跡なり、必ずそこに暮らしていた「ヒト」たちの痕跡があるはずである。それが形として残っているのが、土器であったり石器であったりするのである。または、サンプリングなどの調査で検出される植物遺体であったりするのである。土器はその文様変遷から相対年代を編成するために研究方法が進められてきた。しかしながら、それは単なる「文様」という土器の中の一属性を分析して進められてきたことである。そこには「土器」を使用した人々の姿

が見えてこない。あくまで「土器」は、その遺跡出土遺物を構成する一属性でしかない。この考え方に基づいたとき、そこに土器とともに出土している遺物についても総合的な研究を進めていく必要性があるのでは無かろうか。

本論で分析資料の出土遺跡として取り上げている、石川県・真脇遺跡は、土器が縄文時代前期初頭から晩期まで、ほぼ切れ間無く出土している。また、多種多様な石器群及び動植物遺体、そして定住社会を示すような遺構など、土器以外の遺物が豊富かつ良好なものとして出土していることから注目したものである。特に、今回分析資料としてあげた蜆ヶ森式期および福浦上層式期の時期には、大量のイルカ骨が一緒に伴って出土している。このことから、当時のマワキでは組織的にイルカを捕獲し、そして他地域の石材が多く確認できることから、他地域との交流が頻繁におこなわれてきたことが、容易に想像できる。このような社会の中で土器がどのように変化したのか。この蜆ヶ森式と福浦上層式との間にある「変化プロセス」は先に述べた。だが、この「変化プロセス」の背景にあるものは、第一章で取り上げた、渡辺仁氏の「余剰生産物の存在」が絡んでくるのではないのだろうかと考えられる。つまり、年間に数十頭ものイルカが捕れれば、充分な「余剰生産物」となりうる。この「余剰生産物」があるならば、経済的なゆとりが生じ、自分たちが使用するものに対し、より「特殊化」または「高度化」すると考えられる。福浦上層式が真脇遺跡で発達したものであるかどうかの型式学的な検討が必要ではあるが、真脇遺跡でこの福浦上層式のような、高度な技術で作られ、また多飾化している土器群が出土しているという「事実」を再確認し、前段階の蜆ヶ森式よりも、土器成形方法においてかなり「進歩」しているということを明確にしようとするならば、土器の変化における「背景」は、以上のように当時のマワキにおける社会構造が絡んでいるということが、今回の結論である。

「語り得ない事柄については、沈黙せねばならない（ヴィットゲンシュ

タイン)」。林謙作氏が渡辺仁氏の階層化社会に関する反論をおこなった際に引用している文句である（林；1995)。確かに本論における「土器変化の背景」という問題は「語り得ない事柄」である。しかしながら、「語り得ない事柄」であっても、出てきている「事実」をしっかりと踏まえて考察をおこなっていけば、ある程度の姿が見えてくるのではないのだろうかと考えられる。また、多くの問題点を残す結果となったが、「土器の変化」とは、先にも述べたが、その「土器」が出土している遺跡なり、地域なりの社会構造が一つの要因となっている。土器が果している社会的機能の問題なども今後の課題研究として残しておきたい。